

ADULT ONLY

BAD END CATHARSIS

VOL. 4



PRESENTED BY ZUTTA





星晶獣の元姿を現しジータ達を脱出させることには成功したけど、予想以上に強かったユグドラシル・マリスに制圧されたロゼッタ。皮肉にも自分の身を引くことに失敗して帝国に生け捕りされる見になっていた。

「う、動けない…?!」

意識を取り戻した彼女が最初に感じた事だった。動けなかった。動こうとする度に重い苦痛が全身を縛ってした。

「ふふ、気分はどうですか？」

気味の悪い声が聞こえてきた。フリーシア宰相がロゼッタを見下ろしながら笑っていた。

「何のつもりよ…?うっ？」

話を終わらせる隙も無かった。何かが体の中で弾けるような膨れ上がる感じがした。

「よくも暴れてくれましたね…
邪魔してくれたご褒美としてその生意気な体に
ユグドラシル・マリスから採取した種を埋め込みました。」

「きゃ、きゃあっ！」

蛇のような何かによって体の中が抉られる感覚だった。息さえまともに出来ない忌まわしい感覚に胸を掴んでみたけど既に体の中にいる「アレ」をどうかすることは出来なかった。



「貴方がどんな星晶獣かは知りませんが、それは貴方の体に根付いて貴方を糧にして成長するでしょう。」

(何を言っているの?)

そう叫びたかったけど口外することは出来なかった。
足掻いているロゼッタの気道は体の中から成長した何かによって塞がれていた。
醜い空嘔が上がりて来るだけだった。
ロゼッタは口の外に出ようとするあれを必死で抑えたけど…
不幸にも体には出口は上だけではなかった。
体をいっぱいにして爆発させようとするように増殖するアレは反対側に、
いや、順路に従い始めた。

そして腸を、体の中を隅々まで蹂躪しながら下がってきたアレは
ロゼッタの抵抗が虚しくても……

(まさか、まさかあああああ!!)

「ぐえええええええつ!!」

醜い悲鳴とともに括約筋をほじってアレは出てきた。

「うふふ、いい表情です。」

自分の体の中からはみ出た触手の束を呆然自失して見つめるロゼッタ。
そんなロゼッタのめちゃくちゃな姿を見つめながら
フリーシアは初めて満足した微笑みを浮かべた。

「逃げた小娘については以前付けておいた保険を使わせて頂きましょう。」
(ほ…けん?)

フリーシアの言葉に疑問が浮かんだけどそれ以上ロゼッタの思考が続く事は無かった。
消えていく意識の中でそれはロゼッタが最後に聞いた言葉であった。

「ふん」

フリーシアは冷笑と共に後ろを向いた。
部屋には触手の動きとともに痙攣するロゼッタの体だけが残されていた。



ジータはノア、フェリなどの騎空団員たちと共にコルワの依頼の解決に向かっていた。ルーマシー群島に残されたロゼッタが心配だったけど今は仕方無かったからまずコルワの依頼に応じていた。しかし…待っていたのは依頼人ではなかった。

「ひ、ひゃああっ」

甘い悲鳴が響かれた。濃厚な媚香が周りを包んでいた。ネバネバした空気がジータの鼻を嫌な感じで刺激した。

「ど、どうして？」

なんとか意識を取り戻したジータが問いを投げた。

「ど、どうして…こんな事を…」
「それは私が「帝国側の人間」だからよ、当然でしょう？」

そう答えたのは「コルワ」だった。

「あなた達は本当に人を信じ過ぎるのよ。相手がどんな奴かも知らずにすぐ騎空団に迎え入れるからこんな目に会うのよ。」
「そ、そんな…ひいいいっ!!」

騎空団に入って団員たちの服を作ってくれたコルワ、何の疑いもなく着ていた服の正体は触手服だった。それがコルワの指示によって正体を現し、今はジータの全身を拘束して刺激していた。

「あ、ついでにいうけど今頃グランサイファーも帝国兵たちに制圧されているはずよ。皆団長みたいに触手の虜になっているはずだから結果は「ハッピーエンド」じゃないかしら？それもこっちの立場からでしょうけどね。」

悪意とはかけらも見えない微笑みを浮かべるコルワ。

「これで仕上げよ。」

コルワの手つきで巨大な触手の塊が召喚された。ジータの体はどうすることも出来ずに触手に埋もれた。

「いや、いやあああああ!!」
悲鳴をあげるジータの股間を違う触手がこじ開けた。ただの挿入ではなく胴体をそのままぶち込む。

「ダメ、ダメダメダメダメダメ!!」

体が異物に浸透される奇妙な感覚にジータは抵抗してみたけど虚しいことだった。子宮口をこじ開け入ってくる触手の模様が腹に浮かんできた。コルワの催眠の効果のため子宮口が開かれる苦痛さえジータには快感になっていた。



腹の中は既に触手でいっぱいだった。
クビは枷が付けられ少女は恥部の丸出しにして拘束されていた。
アナルに入った触手は止めどなくシーダの体中を蹂躪していた。

「酷い姿です。」

その光景を見つめていたフリーシアは嘲るように言った。

簡単に処刑することも出来たけど、それでは怒りが収まらなかった。

これは憂さ晴らしだった。今まで邪魔されてきたことに対しての…
ルリアは返して貰ったし騎空団は制圧された。
数人の団員に逃げられたみたいだったけど、
騎空団の核心人物がここで戒められている以上
大した脅威にはならないはずだった。
ルーマシー群島で出現した正体不明の星晶獣は
既に肉のかたまりにすぎないという報告も受けている。
すべてが順調ということを確認したら怒りが少し収まる気がした。

「はうっ、ううっ!!」

喘ぎを漏らすジータを残してフリーシアは部屋から離れた。
また忙しくなる頃になったからこんな虫けらに構っている暇も無いはずだった。

「好きに弄んでもいいです。」

部下たちに虫けらの処分を命じた。

「ひっ、ひゃあああああ!!」

壮絶な悲鳴を聞きながら部屋から離れるフリーシアの気分は満足されていた。



星晶獣セレストに関わったという理由でジータと一緒に捕まったフェリ、既に死んだ幽霊の身だった彼女には死より凄まじい事が待っていた。

「モモ、モモ!!」

モモはフェリを地中に埋めてしまいそうな勢いで突いていた。腰を振る度に彼女の股間から愛液が吹き出されていた。荒い息を吐きながらモモの名前を叫んでいるフェリ。

「も、もうダメだ、モモ!!」

口では拒否していたけど。絶対やっては行けないことだと頭ではわかっているけど、彼女は足を開いてモモを受け入れていた。節制出来ない気分が彼女の腰を上げていた。

コルワの催眠は幽霊のフェリにも十分に効いていた。

「まさに獣同士の交尾だな」

それを見つめる帝国軍の嘲笑も気にせず、交尾に熱中してるフェリは悪霊の淫気をその身に受け入れて悲惨な姿に落ちていくばかりだった。



その交尾からどれくらい経ったのか。

「ああっ、きゃあああああっ!!」

自製の聞かないフェリの悲鳴が鳴り響いた。
風船みたいに膨らんだ彼女の腹は彼女が何かを孕んでいる事を示していた。

「う、生まれる!!」

羊水が流れて、それはフェリの腹から出ようとしていた。
産痛が彼女の体を圧迫した。
父が誰かは分かっていたけどそれがむしろフェリを恐怖に追い込んでいた。
そもそも幽霊が出産とは…一体自分は何を孕んでいるというのか…?

ぷっ!!

そんな彼女の疑問に答えるようにフェリの股間をこじ開いてそれは頭を表した。

「ひいっ!!」

愛すべき自分の子供の姿にフェリは喜ぶことが出来なかった。
いや、むしろそれは彼女の理性を吹き飛ばした。
巨大な目玉の姿。
自分はイビルアイを産んだのだった。

「いやあああああああ!!」

虚しい叫びが鳴り響いた。
ある惨めな幽霊の末路であった。



「あはっ、あはあああっ!!」

床に四つん這いになったまま股間に
触手をつけているコルフ。
彼女の全身が強烈な快楽と背徳感に
支配されていた。
中毒性の強い催淫成分が彼女の体中に
流されていた。

「行っちゃう!!また逝っちゃうわ!!」

何度めかも分からないエクスタシー...
逃れない快楽に飼いならされて、
コルフは帝国の奴隷として
落ちていくのであった。



「…うっ」

ジータの口から低い喘ぎ声が流された。
膨らんだ腹が蠢き始めた。
また生まれようとしていた。

ぷっ!!

キエエエエエ!!

恐ろしい破裂音と共に
ジータの股間からおぞましい
生き物が頭を表せた。
普通の人なら見るだけで
悲鳴を上げそうなおぞましい生き物…
ジータは自分が産んだ
その生き物を虚ろな目で見つめていた。

何も感じなかった。

自分は孕んで生む行為を
繰り返し替えることになるだろう…
ジータは考える事を諦めた。
その酷い環境でまともな精神を
維持することは不可能であった。

少女の旅行は終わった。

夢は叶えられなかった。

その果てとは程遠い、陰湿で窮屈な肉塊の中で
少女の人生には悲惨な終止符が付けられたのであった。

Bad End Catharsis Vol.4

さーくる : けんじゃたいむ

著者 : Zutta (sayguilty@gmail.com)

Pixiv ID:813256

イラスト : ねこのしっぽ様

発行日 : 2016年8月13日



イベント : コミケ90



PRESENTED BY ZUTTA

けんじゃたいむ